

すれちがう時間

根上生也 著

僕の父さんは写真が好きだった。どこかに出掛けるときには、いつも首からカメラを下げて、やたらめったら記念写真を撮る。小学校の入学式だといっては写真を撮り、誕生日だといっては写真を撮り...

そういう父さんが嫌いなわけではないが、毎年、初日の出をカメラに収めるのだと言って、早起きに付き合わされたのは辛かった。小学校のときには、それもイベントの1つとして受け入れていたけれど、中学生や高校生になれば、大晦日の深夜から年明けの瞬間まで友達と過ごすことが多くなり、元旦の朝は、ゆっくりと寝ていたかった。

そういう僕を叩き起こして、初日の出を見ようと誘う父さんを煩わしく思い、怒鳴りつけてしまったこともあった。しかし、そういう父さんはもういない。3年前、僕が大学に入学した日の翌日に癌で死んでしまった。死ぬ間際まで、大学の入学式の写真が撮りたいと言っていた父さん。友達に撮ってもらった僕の入学式の写真を見ることなしに、父さんは逝ってしまった。

そういう父さんの意志を継ごうと、僕は父さんが死んだ翌年から、初日の出を見ようと心に決めた。僕自身はさほど写真に興味がないので、元旦に備えて、わざわざカメラやフィルムを用意する気にはなれない。だから、写真に撮らないまでも、父さんがファインダー越しに見ていた景色を、父さんに代わって、見続けていこうと決心したのだ。

とはいえ、大晦日の夜更かしがたたって、今年も初日の出を見そこねてしまった。そして、年が明けて、5日経った今日、僕にとっての初日の出を見ることになった。

5日になってから初日の出を見ようとする人など、どこにもいないだろう。おかげで、1月5日、日の出前の川原の土手には、僕以外には誰もいなかった。まあ、それもいいさ。僕は日頃の運動不足を解消す

るために、土手の上をジョギングして、日の出の瞬間を待っていた。

しだいに河口方向の水平線が明るんできた。そして、その水平線に沿って、オレンジ色の線分が左右に伸び、その中央部分が膨らんでいく。いよいよ太陽のおおまじだ。

僕はジョギングを止めて、日の出の瞬間を見つめていた。と、そのとき、太陽光とは別の光が僕を照らした。それも頭上から。そして、見上げると、なんと空飛ぶ円盤が浮いているではないか！

「ぐえーっ！」

僕は驚きのあまり、体が動かない。そのまま上を見上げて、固まってしまった。

すると、その円盤の底の部分に穴が開き、そこから人の影が現れた。そして、僕を照らす光に沿って、しだいにその影が下りてくる。よく見ると、栗毛色の長い髪の毛をなびかせた女性の姿だった。体全体にぴったりと吸い付くような青い服を着ている。腰の位置に巻かれた赤いベルトが印象的だ。

僕は女性の姿に少し安堵した。その円盤から現れたのが、恐ろしい姿の宇宙人だったら、どうなっていたらう。

そう思う間もなく、その女性は僕の目の前に着地した。そして、彼女は、僕に微笑み、

「さよなら」

と言うなり、僕に抱きつき、キスをした。僕は完全に固まってしまった。いったい、これは何なんだ。なぜ、僕を抱きしめて、キスをするんだ。訳がわからず混乱する僕を見て、彼女はまた微笑み、僕から離れた。僕も彼女の顔を見つめた。

なんて美しい宇宙人なんだ。いや、宇宙人ではないのかもしれない。でも、宇宙人ではないとしても、これは納得がいく状況ではない。いったい僕の身に何が起こったのだ？

再び、彼女の体が光の中に浮いた。そして、光に牽引されて、彼女は円盤の中に取り込まれた。それとほぼ同時に、円盤の光が消えた。強い光に慣れてしまった僕の目では、その後の円盤の行方を追うことは不可能だった。

5日遅れの初日の出、そして、空飛ぶ円盤から現れた絶世の美女。父さんが生きていたら、なんで写真を撮らなかったのだと怒られたかもしれない...

僕が下宿するアパートの部屋。翌日、目を覚ますと、僕の胸の上で、女の人が泣いていた。昨日の朝といい、なんで突然、事が起こるのだ？

よく見ると、その女性は昨日、円盤の中から現れた美女ではないか。おまけに、彼女は裸で、僕の体に絡まるように寝ていた。

いったい何なんだ。こんなことがあってよいのか。もしかすると、これは夢なのかもしれない。それならそれで、この状況を受け入れてしまおう。こんな美人とのラブシーンなんて、滅多にあることではないのだから。夢なら夢でいいではないか。

そう覚悟して、僕は彼女を抱きしめた。その僕の反応に承えて、彼女が悩ましげに体をくねらした。その後のことはご想像にお任せする...

事が済むと、彼女は何もなかったかのように、服を着て、僕の部屋を出ていった。

そして、その翌日も、同じようなラブシーンが続いた。これが夢だとすると、なんと長い夢なのだろうか。もちろん、夢の世界の時間と現実の世界の時間の流れは別物だから、長いといっても、現実の世界では、一瞬のことなのかもしれない。

しかし、彼女とのラブシーン以外の当たり前のような生活もこの夢に組み込まれている。お腹が空けば、コンビニに食べ物を買に行かなければならないし、テレビもいつもどおりの番組をやっているし、トイレにだって行きたくなる。

子供の頃なら、トイレで放尿している夢を見ると、僕はたいていオネショをしていた。大人になってからは、そんな夢を見たことはないが、もしこれが夢だとすると、僕の布団は大変なことになっている。

こういう日々が数日続いた。ここまで夢のようなことが続くと、もはやこれは夢ではなく、現実なの

ではないかと思えてくる。

となると、夜な夜な僕の部屋を訪れる美女も、実在の女性として受け入れざるを得ない。そういえば、濃厚なラブシーンを何度も繰り返しておきながら、僕は彼女の名前さえ知らない。今度、彼女が現れたら、せめて彼女の名前を聞こう。

そして、彼女がやってきた。僕は彼女を部屋に迎え入れ、彼女が畳の上に腰を下ろしたところで、彼女に聞いた。

「今更聞くのもおかしいけれど、君の名前はなんて言うんだ」

しかし、彼女はすぐには答えようとしなない。そこで、もう一度、彼女の名前を聞こうと口を開いた瞬間、いきなり彼女が言った。

「マリアよ」

「君の名前は...」

おかげで、僕の質問と彼女の答えがかち合ってしまった。彼女はマリアというのか。日本人のようにも見えるが、どこか西洋の雰囲気のある女性だと思っていたら、名前も洋風だった。

彼女の名前を聞いて以来、僕たちは、普通に話をするようになった。でも、どことなく会話がぎこちない。特に、マリアの身の上を聞こうとすると、彼女は多少不機嫌そうだった。言葉を交わさずに、愛し合っていた日々を思うと、今更、何を聞くのかということなのかもしれない。

僕もその夢のような日々に浸りきっていて、マリアが空飛ぶ円盤から現れた女であることを忘れかけていた。つまり、マリアは宇宙人なのだ。となれば、外見は人間と同じでも、マリアの心の中には、僕には想像もできないような世界が広がっているのだろう。少なくとも、マリアは僕の知らない世界で生きてきた。だとすると、その身の上を聞いたところで、僕には理解できないことかもしれない。

でも、それならそれで、興味津々ではないか。僕はあえてマリアに聞いた。

「君は宇宙人だよ。いったいどの星からやってきたんだい？」

しかし、マリアは僕の質問を無視した。

その後も、マリアが毎晩やってきた。会話のぎこち

なさは相変わらずだ。マリアが宇宙人であることを思うと、うまく日本語をやりとりできなくても当然なのかもしれない。しかし、マリアは僕のことを愛してくれている。うまく会話を交わせなくても、僕はそれを実感していた。

そして、ある朝のこと、マリアがドアを開けて部屋を出ていこうとしたときだった。彼女は振り向いて、僕に言った。

「今日は、家を出てはいけません」

そして、僕の反応も確かめずに、出て行ってしまった。なぜ、家を出てはいけないのか。その理由ぐらい教えてくれてもいいのに...

しかし、家を出るなどと言われても、食料を調達しに外出しないわけにはいかない。僕は、マリアの言葉を無視して、マリアが現れる前に腹ごしらえをしようと、行きつけのコンビニに向った。

僕のアパートを出ると、そこは軽い下り坂になっている。その下り坂をまっすぐ下っていったところに、コンビニがある。その道の途中には、僕が通う大学の裏門にあるバスのロータリーからの道が合流している。その道も軽い下り坂だ。そして、その2つの下り坂が合流する交差点には、僕が時々夕飯を食べに行く居酒屋がある。

その居酒屋が見えるくらいの位置に来たとき、どこからバリバリという音が聞こえてきた。いったい何の音だろうと辺りを見回しても、思い当たるものが見つからない。しかし、明らかに、僕が向おうとしている方向からその音がしている。

そして、居酒屋のある交差点に差し掛かった瞬間、その音の正体が明らかになった。それは、バスのロータリーの方から僕の方に向かってくる10トントラックだった。そのトラックが電線を引っ掛けて下り坂を下りてくる。トラックの移動によって、電柱の電線がバリバリと剥ぎ取られているのだ！

さらに、悪いことに、トラックは徐々に加速して、僕の方に突進してくるではないか。僕は慌てて、コンビニの方向に走っていった。そのトラックが僕を追ってくるとすれば、下り坂の合流地点で、大きく向きを変えなければならない。となれば、トラックは速度を落とすはずだ。

そんなことを考えたのか、考えないのか。それは

よく覚えていないが、僕はその交差点から必死で離れようとした。

走る僕の背後で、バリバリという音が大きくなってくる。状況を確認しようと振り向くと、トラックは僕を追うことなく、そのまま直進して、あの居酒屋に突っ込んでしまった。さらに、その光景を見て僕は固まってしまった僕を目掛けて、トラックが剥ぎ取った電柱の電線が降ってきた。そして、僕の首筋に激突し、その衝撃で僕は道路に転倒した。

トラックは居酒屋に頭を突っ込んだ形で止まっていた。居酒屋の前面は、完全に大破していた。幸い、店は正月休みだったので、中には人はいないはずだ。そこに、トラックの運転手と思われる男がほとんど潰れている運転席に乗り込んで、トラックのエンジンを止めた。ということは、あのトラックは無人で下り坂を転がってきたということか。

僕はとんだ事件に巻き込まれてしまった。その後、第一目撃者として警察署に連れていかれて、長いこと調書を取られた。おかげで、その夜はマリアと会うことはなかった。

もしかすると、マリアは僕がこの事件に巻き込まれることを知っていて、そうならないように家を出るなど忠告してくれたのかもしれない。宇宙人のマリアには、予知能力があるのではないか...。いずれにせよ、僕は、マリアの忠告を無視した結果として、首筋に大きな青アザを作ってしまった。

そこで、次の晩にマリアがやってきたときには、僕はあえて聞いてみた。

「もしかして、君は僕が事故に巻き込まれることを知っていたのかい？」

彼女は、僕の首筋の青アザを心配している様子だったが、僕の質問にはすぐには答えてくれなかった。会話がうまく噛み合わないのはいつものことなので、それは気にすることでもない。しかし、しばらくしてから聞かされた彼女の話には驚いた。

マリアの話し方は、理由と結論の順番が逆になる傾向があって、理解しにくいのだが、いつになく熱心に話すので、僕は彼女の言葉を真剣に聞いた。その内容をかいつまんでいうと、次のとおりだ。

— 確かに、マリアは地球から遠く離れたある星

からやってきた宇宙人だった。彼女の星の住人たちは、外見は地球人と同じなのだが、生理的にも、精神的にも、まったく別次元の存在なのだった。実は、マリアたちの時間は、僕たち地球人の時間とは逆向きに流れているのだ。

つまり、僕の未来はマリアにとっては過去であり、僕の過去はマリアにとっての未来なのである。だから、マリアには僕が事故に巻き込まれることが事前にわかっていたわけだ。もちろん「事前」といっても、マリアにとっては、すでに起こった過去のことだ。

そういう宇宙人が地球の存在を知り、いろいろな調査を開始した。その調査の結果、地球人が自分たちとは逆向きの時間の中で生きていることが明らかとなった。マリアはそういう調査を行うために地球に派遣された科学者の1人なのだそうだ。

その調査の一貫として、互いに逆行する時間の中で生きる人間の間で性交渉を行った場合、はたして子供が生まれるかどうかを調べることになった。マリアはその実験を担当している。そして、僕はその実験台として選ばれたのだった。――

こんな話を聞かされて、僕はどう対処したらよいのだろうか？ 空飛ぶ円盤から現れたマリアの姿を見ていなければ、こんな話を聞いても、きっと信じることはできないだろう。

いずれにせよ、僕は実験台だったのだ。しかし、今までのマリアの態度は、決して科学的な実験をしている冷静な科学者という雰囲気ではなかった。うまく言葉が交わせないとしても、僕たちはお互いに愛し合っていたと、僕は確信している。

男と女、オスとメス。どちらでもよいが、僕たちは本能적으로お互いを求め合っていた。人間らしく精神的なつながりを求めていたと言えれば、嘘になる。しかし、本能的に求め合うことだって、男と女の1つの愛の形だと思いたい。

しかし、それはすべて過去の話なのだ。時間が逆行する宇宙人の女とどうやって愛を育てればいいのか。マリアの言葉によれば、彼女は僕たちの時間で1週間後に地球にやってきた。つまり、僕にとっては、1週間後にマリアとのお別れが待っているのだ。となれば、これから先、マリアはしだいに僕のこと

を忘れていく。そもそも、この時点でさえ、僕と過ごした夜のことを記憶してはいないのだ。

この状況にいるのは僕だけではない。マリアの立場になって考えれば、どうなるか？ ここ数日間は2人で愛を深め合っていた。しかし、しだいに僕の彼女に対する愛情は消え失せていき、最後には、ただ女の体をむさぼるだけの男に成り下がってしまう。それを思うと悲しい...

そう思ってマリアの顔を見ると、彼女も僕を見つめていた。ここから先はどちらにとっても下り坂でしかない。僕は、今が2人の結びつきが最高になる最後の瞬間であることを悟った。そして、マリアを布団の上に押し倒した。

その後、僕たちの会話はしだいに困難になっていった。というのも、マリアにとっては、日本語を話す経験が減ってきているからだ。おかげで、マリアと出会ったばかりの時のように、何の会話もせず抱き合うことが多くなった。とはいえ、マリアは僕の首筋のアザを気にしている。

もちろん、僕にとってはこのアザの原因は明白だ。しかし、マリアにとっては、このアザは不思議でならないだろう。マリアの時間の流れに沿って考えれば、何の原因もないのに、そのアザが日に日に濃くなっていくのだから。そして、事故を目撃して、アザの原因を知る。それを何とか阻止しようと、僕に忠告をしてくれたのだろうが、マリアが経験してしまった僕の未来は、僕の力では修正不可能だった。

そして、最後の夜が来た。本能的に求めようとしても、しだいにコミュニケーションがとりにくくなると、あっちの方もあまりうまくいかなかった。でも、今日はマリアと結ばれる最後の晩だ。そして、マリアにとっては最初の晩なのだ。そんな僕の気持ちとは裏腹に、マリアは科学的な実験のつもりで事を淡白に進めるかもしれない。それならそれでもいい。少なくとも、僕は最後の愛情を思いっきり彼女に注ぎ込むことにしよう。

事が済んで、僕はマリアの胸に顔をうずめて、涙を流していた。一方、マリアは感傷的になっている僕を押し除けて、そそくさと服を着て、持ってきた鞆の中から、いろいろな計測装置を取り出した。そして、裸のままの僕の体のいろいろな場所を測定して

いった。それが終わると、装置を鞆に詰め込んで、僕の部屋を出ていった。それも、後ろ向きに歩いて...

その翌朝、日の出前。僕は MARIA と出会った川原の土手の上にあった。僕は劇的な MARIA との出会いのシーンと同じように、劇的なラスト・シーンを期待していたのだろう。しかし、その期待は虚しいものかもしれない。この時点での MARIA にとって、僕は実験材料として選ばれた 1 人の人間でしかないのだ。それは宇宙人と性交渉を持つとどうなるかという科学的な興味の対象でしかない。

出会いのときの MARIA の熱いキス。それは MARIA の僕に対する愛情の証しだった。そして、別れを惜しむ最後の抱擁だったのに、事情のわかっていなかった僕はただ立ちすくむだけで、その抱擁に応えようとはしなかった。それと同じように、もし仮にここに円盤が現れ、光の中を MARIA が下りてきたとして、僕がわかれを惜しんで抱きついたところで、彼女は面食らうだけだろう。

いずれにせよ、どこを見上げてても、空飛ぶ円盤が現れる気配はなかった。もしかすると、僕が気づかないだけで、円盤は僕の上空にいて、僕を実験台にするかどうかを品定めしているのかもしれない。

そして、一条の光が僕の目を刺した。それは僕の期待に反して、円盤から降り注ぐ MARIA を乗せた光ではなかった。東の空から水平に飛んでくる日の出の太陽が放つ光線だった。

それ以来、MARIA は僕の部屋を訪れることはなかった。地球に来たのは今回が初めてだという MARIA の言葉を信じれば、僕と MARIA が出会うことは、もう二度とないのだろう。それどころか、あんな美人が僕と付き合ってくれるなんてことが、今後ありえるとも思えない。きっと父さんが生きていたら、なんでそんな美人を写真に撮っておかなかったのだと、僕を叱ったにちがいない。

いや、待てよ。MARIA の写真は本当に手に入らないのだろうか。確かに、未来において、僕と MARIA が出会うことはない。未来において... でも、彼女の時間と僕の時間は逆向きに流れているのだ。だとすると、僕と MARIA が僕の未来において出会うこと

はないとしても、彼女の未来において、僕と MARIA は出会うことがあるのではないか。それは僕の過去において...

はたして、僕は昔に MARIA と出会ったことがあっただろうか？ そう思いを巡らしてみても、思い当たることがない。だって、あんな美人と出会えば、絶対に忘れるわけがないではないか。

いや、そうとも言えない。今の僕ならそうだろうが、子供の頃に MARIA に出会っていたとしたら、記憶には残っていないかもしれない。

そういえば、僕が幼稚園生だった頃、父さんと公園で遊んでいたときに、美人なおねえさんがやってきて、僕たちに話し掛けてきたことがあった。そのおねえさんは、僕と同じくらいの男の子を連れていた。そして、不思議なことに、その男の子は、僕とすごく似た顔をしていた。

僕はそのことが印象的だったので、その子のことばかりが記憶に残っていて、そのおねえさんの顔はよく覚えていない。一方、父さんは、そのおねえさんがあまりに美人なので、おおはしゃぎだった。僕に似たその子の写真を撮りたいと言っていたが、本当は、そのおねえさんを被写体にしたかったにちがいない。そして、父さんは、三脚を立て、セルフタイマーを仕掛けて、僕たち 4 人の写真を撮った。

「もしかすると、もしかするぞ」

僕はその写真を見るために、久しぶりに実家に帰った。母さんは、僕の突然の里帰りに驚いていた。最初は、どうせ帰ってくるなら、正月に来ればいいのにと怒っていたが、父さんの思い出話を始めると、すぐに機嫌を直してくれた。そして、僕は、父さんが昔に撮った写真を見ようと持ち出した。

母さんは、押入れから、父さんのアルバムを大事そうに持ってきた。そして、順にアルバムのページをめくり、親子 3 人の我が家の歴史を語っていった。ドテラを着た父さん、割烹着姿の母さん、その 2 人に支えられて立っている赤ちゃんの僕。たくさんある写真の中でも、その写真が印象に残る。

「ほんと、父さんは写真が好きだったわよね。いつでもカメラを持っていて、何かというとシャッターを押していたわ。ほら、この写真を見てごらんさ。どこの人かわからいけれど、その人のお子さ

んがあんたに似ているからと言って、撮ってきた写真よ。確かに、この子はあんたに似てるけど、ほんとは父さんはこの人の写真が撮りたかったのよね。この子があんまりあんたに似ているから、もしかして、父さんがこの人に産ませた子なのかと疑ったこともあったけど、父さんがこんな美人な人に相手にされるわけではないし。なんといっても、父さんは正直な人だったから...」

そういつて僕たちが見入っていたのは、父さんと僕と僕に似た子供と美人な女性が並んでいる写真だった。

「マリアだ...」

僕は心の中でつぶらいた。その女性はまぎれもなくマリアだった。

「でもねえ、父さんに孫の顔を見せてあげたかったわよね」

「何を言っているのさ。結婚もしてないのに。僕はまだ大学生なんだよ」

「そんなこと、わかってるわよ」

でも、母さん。父さんはちゃんと孫の顔を見ているよ。説明しても信じてもらえないだろうけれど、マリアは僕との間に生まれた子供を、僕と父さんに見せにきてくれたんだ。

僕は我が子といっしょに乗った滑り台を思い出していた。

2000/10/27